

飼育レポート

飼育レポート1

アシカ夫婦の繁殖期

飼育展示担当 千葉 可奈子



マヤ(右)とアイラ

昨年の12月に大森山動物園にお嫁にやってきたカリフォルニアアシカのアイラ。到着後、早い段階でオスのマヤと一緒にプールで泳ぐことができました。そんな姿を見ていたら、来年の6月には赤ちゃんが見られるかもしれないと期待させてくれました。そんな矢先、まさかのトラブルは突然訪れました。

アシカの繁殖期は5～7月です。例年、マヤは早ければ4月末くらいから発情の兆候を見せ始めます。野生のアシカは繁殖期になると、メスは安全に子育てが出来る場所に集まるので、オスの場所取り争いは激戦必至。戦いに勝った一番強いオスが人気の一等地を手に入れ、自分の遺伝子を残すことができるのです。そのため、繁殖期のオスは普段に比べ気性が荒くなります。

4月末のある朝、アイラが前ヒレをケガしていました。そばには猛アピールをしているマヤ。しつこく追いかけてくるマヤが嫌で痛いのを我慢しながら逃げるアイラ。無理して動いてはケガの治りも遅くなり負担もかかるので、療養のために2頭を隔離することに。アイラのケガもよくなり、いざ、再び同居となった時、仕切り扉を開けるとアイラが全身で嫌悪感をあらわにしたのです。マヤが近づくと大きく口を開け「ガアッ!」と威嚇します。発情ピークの過ぎ去りつつあったマヤは、アイラのあまりに激しい反応にたじたじ。本当はちょっと怖いのを押し殺して素知らぬ顔をアピールするマヤ。アイラの拒否反応は収まらず、しょんぼりしたり、逆ギレしてみたり、複雑な心境のマヤくん。

激しい夫婦喧嘩は見ているこちらをハラハラとさせますが、喧嘩するほど仲がよい夫婦であるように、近いうちにまた2頭一緒に泳ぐ姿が見たいです。

飼育レポート2

サンショクキムネオオハシの同居

飼育展示担当 千葉 可奈子

大森山動物園で2000年から飼育を開始したサンショクキムネオオハシは、国内での飼育数が少なく、単独飼育がほとんどです。海外からの新規個体導入も難しく、現在の個体がいなくなってしまう場合は、国内で見ることができなくなるかもしれません。

こんな状況の中、繁殖の期待を背負い、待望のオスが昨年12月に神戸市立須磨海浜水族園からやってきました。お婿さんの名前はオオハシくん。推定年齢16歳で、以前からいるメスのコセンより1つ年上です。うまくいくと、国内で唯一となるオオハシペアが誕生です。

検疫を無事に終え、いざコセンの待つ展示場へ。はじめは網越しのお見合いを行うことから始めました。コセンもケージの前でオオハシくんを眺めることも多くなり、お見合いは順調に進んだように見えてましたが、いざ2羽を同居させてみると、コセンは目つきを変えオオハシくんを追いかけ回しはじめたのです。執拗な追いかけて同居は中止に。

オオハシくん^に展示場に慣れてもらい、コセンにも展示場は共有スペースだとわかってもらうため、コセンをケージに入れ、オオハシくんが展示場を自由に使う時間を設けました。はじめはあまり動き回りませんでしたが、慣れてくるとコセンに向かって大きく鳴いたり、ケージのそばに滞在したりする時間が長くなりました。

時にはオオハシの求愛の果実であるブドウをくわえてコセンのケージのそばに寄ることも。はじめは距離をとっていたコセンもオオハシくんが来ると自分から近づくように。今度こそ、うまくいくのでは!?と思い、再び同居を試みましたが、結果は惨敗。以前と変わらず、コセンがオオハシくんを攻撃し、オオハシくんもすっかり怯え、震えてしまいました。

オオハシのカップルが成立するまでには、まだまだ時間がかかりそうです。



コセン(左)とオオハシくん

飼育レポート3

ライオンの同時搬入と今後の同居訓練

飼育展示担当 佐藤 正



ロアー



トモ

6月30日早朝、王者の森に新しいライオンが仲間入りしました。群馬サファリパークからオスのロアー、多摩動物公園からメスのトモの同時搬入。大森山動物園では、今まで1度に複数の猛獣を搬入した経験がないため、搬入手順を何度も打ち合わせして当日を迎えました。

獣舎入口に横付けされたトラックからライオンの入った輸送箱を1個ずつ獣舎内に入れ、ライオンを専用通路から室内に誘導していく作業を1時間程かけて行い、2頭を室内に収容するのに約3時間かかりました。室内に収容された2頭は対照的で、ロアーはすぐに室内に慣れたのか横になりリラックスしていました。一方、トモは落ち着かない様子で室内を動き回り心配しましたが、時間が経つと横になり落ち着きを取り戻しました。

翌日から室内に餌をおいて通路の移動訓練や慣れてくると室内から展示場への展示訓練を行い、8月末には隣に展示しているアムールトラの様子を気にしながらもようやく以前からいるメスのマンゴーを含め3頭日替わりで展示場に出す事ができるようになりました。

これからは、ロアーとトモのお見合いを繰り返しながら同居できる環境を作り、二世の誕生に向けて飼育していきます。

動物病院から

趾瘤症(バンブルフット)の予防

獣医師 小川 裕子



趾瘤症のペンギンの足

動物園の診療では、足裏の病気が多いようです。今回はフンボルトペンギンの趾瘤症(バンブルフット)とその予防についてご紹介します。この病気は足裏の傷からバイ菌が入って腫れたり、魚の目状に角質化したりしてしまう病気です。たかが魚の目と侮ってはいけません。傷口から入ったバイ菌が原因で死んでしまう事もあるのです。主に、足を引きずって歩く跛行という症状がでます。床が硬いコンクリートであることや、立っている時間が長い事が原因です。

ペンギンの足にかかる体重を足裏全体に分散させるため、展示場の一部に人工芝の場所を作りました。跛行のペンギンが自ら人工芝まで来る理由は、体重が分散されて楽だからなのでしょう。まだ発症していないペンギンの予防にもなります。病気の予防は治療以上に大切です。

また、動くものを追いかけるペンギンの習性を利用して泳ぐ時間を延ばす事も病気の予防になります。お客様がプール横を歩く時にペンギンが並行して泳ぐ事はとても良いことです。猫じゃらしで猫と遊ぶ様に手を動かしてペンギンと遊んでください。

バンブルフットはペンギンの他にも鳥類全てに発症します。地面を砂地にしたり、止まり木に人工芝を巻いたり工夫がたくさんあります。

病気の予防方法を工夫することも獣医師の大切なお仕事です。



人工芝の上で休むペンギン